

翌日、里見実堯は単騎で稲村城に馳せ参じた。義豊への見舞いであるが、御傍衆の一件に対する釈明もある。

昨日のやりとりは、すべて中里実次が実堯へ報せていた。

成る程、これは義豊のことというより、奉行衆に取って代わるための野心を確かめ合う談合と呼ぶべきか。

「兄者、よう参られた」

迎えに出た中里備中守実次に、実堯は笑って手を上げた。

「殿の取り巻きはな、些か思慮が足りぬ。年青として儂が首根っこを押さえている間はよいが、いつまでも鎮まっておるまい」

「すまぬのう」

「兄者もこの際、はつきりと〈一統〉を捨てるようおっしゃるがよからう。先代亡きいま、兄者を置いて物申せる者もおりませぬ」

この日、中里備中守実次は御傍衆としてではなく、中立を志した。ゆえに剃髪し、〈中里備中入道正端〉と号して、この場に臨んでいた。

実堯は義豊に対し、機嫌伺いを告いだ。

「叔父上は儂を病人にしたいのかな？」

「鎌倉攻めで気鬱となられた由、気懸かりに候」

「気鬱とは、大袈裟な」

義豊は苦笑いを浮かべた。

「もう、〈一統〉のことは忘れなされ。急がずとも、いつか世が、それを為すべきと示すときに訪れることでしょう。我らは寄騎筆頭の里見家を太く大きなものとし、在地豪族をも呑み込む程に育つべきなのです」

実堯が穏やかに語りかけた。

義豊は言葉がない。この場は丸く収まり、波乱のないまま、見舞いの対面は終わった。

御傍衆は面白くなかった。いや、いちばん面白くないのは、義豊だった。父に云われるうちは、まだいい。しかし、叔父に云われることは、どうにも堪え難い心地だった。

もしもこの場に美がいたら、心を見透かされて

「小さい男よ」

と話られただろう。器が小さいことは認めざるを得ない。しかし、〈一統〉を否定されたことは、やはり許し難い。

ひとつだけ明確になったことがある。

義豊にとつて目の上の瘤である奉行衆。傅役や舅たちを含む御傍衆。これとの対立が浮き彫りになったということだ。

「殿の御味方は、どこまでも我ら御傍衆ですぞ」

中里源太左衛門も本間八右衛門も、きつとそう云うだろう。

奉行衆も御傍衆も、在地豪族である。〈一統〉の名のもとに吸収されるべき存在だ。しかし、御傍衆の方が懐柔しやすいかも知れぬと、義豊は考えた。

中里源太左衛門等は里見実堯を嫌っている。

「いつかは排斥せねばなるまい」

誰いうとなく義豊は独り言を呟いた。

大永七年（一五二七）二月。

里見義豊は上総国矢那郷（現・木更津市）の鋳物師・大野大膳亮に感状を与えている。

房州鋳物大工職之事、望申候、

御心得候、不存無沙汰、如先例可勤之也、

大永七年

十二月廿三日

（花押）

大野大膳亮かたへ

それには、次の添え状もあった。

房州大工役之事、被申上候、

令披露御一筆遣之候、如先例、

不存無沙汰、可被走回候、謹言、

大永七年

十二月廿三日

実次（花押）

大野大膳亮殿

すなわち

「房州の鋳物師を束ねる役を任せるものなり」という地位を与えたものである。

これは民衆懐柔の内政である

在地豪族とは無縁の民衆懐柔、義豊の行動は  
〈二統〉に向かっていた。

十十十

相剋のはじまり(2)

夢酔 藤山